

「藤原不比等と橘三千代」の果てしなき野望

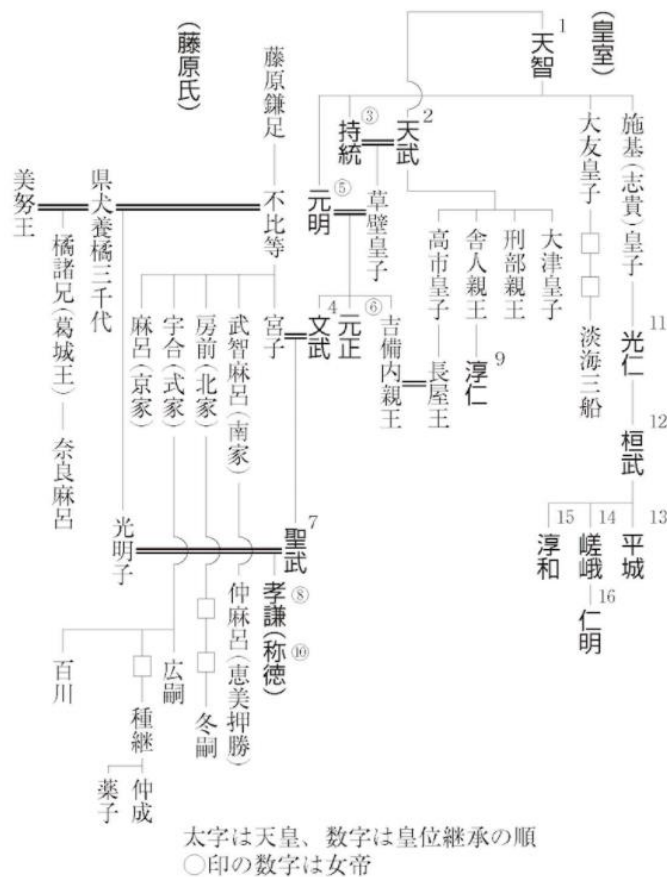
2021年7月30日

我部山 民樹

1. はじめに

時期は不詳だが690年頃、朝廷内で絶大な権力を誇っていた藤原鎌足の次男・不比等（ふひと）と持統天皇のお気に入りの橘三千代（たちばなみちよ）の高官同士が恋に落ち、お互いのパートナーを捨てて、結婚したのだ。驚きである。現在では到底想像できないことだ。最近、国会議員と高級官僚、国会議員と地方議員の不倫報道等で世の中を騒がせている例があるが、その比ではない。当時の朝廷内は現在よりはるかに寛大だったのだろう。

野望家同士の結びつきにより、相乗効果もあったのか、二人の野望を次々と実現していった。天皇の外戚になる企てをちやくちやくと実行し、権力基盤を築いていったが、‘天皇家、藤原家、橘家の関係を示す家系図’を見ればそのしたたかな野望を読み取ることができる。



(因みに聖武天皇と光明子は甥と叔母の関係である。)

2. 藤原不比等の野望

659 年、中臣鎌足の次男として生まれる。

672 年の壬申の乱で、近江朝側についた鎌足の同族の有力者が処罰を受けたこともあって、中臣氏は朝廷の中枢から一掃された。当時 13 歳の不比等は何の関与していなかったが、下級官人からの立身を余儀なくされたと考えられている。



不比等は不気味な野望家である。

690 年頃に後妻になった橘三千代の力添えをもらって、天皇の外戚になることを企んだ。「天皇家に娘や孫娘を後宮に入れて、彼女らが天皇の子を産み、生まれてくる子が天皇になって、自分が天皇の外戚となることだ」。そして権力基盤を築くことを目論んだ。

当時、目を付けていたのが軽皇子で、自分の娘を夫人（(ぶにん、(注.1))に入れたいと思っていた。軽皇子が即位して文武天皇（持統天皇の孫）になった。その直後に不比等の娘宮子とその夫人になった。不比等が三千代に働きかけ、三千代が持統天皇に強く推薦したからだ。どうしたことか、三千代は持統天皇のお気に入りであったので、持統天皇は承諾した。

697 年、軽皇子（かるのみこ、持統天皇の孫）が即位して文武天皇（もんむてんのう）となった。その直後、企ての手始めに、藤原不比等（ふじわらふひと）は賀茂比売（かものひめ）との娘・宮子を文武天皇夫人（ぶにん）に送り込んだ。

注記 1. 天皇の後宮に入った女性のランク

皇后や妃になれるのは皇族のみである。

- ・后（こうごう/おおきさき）
- ・妃（ひ/きさき） - 2 名以内、四品以上の内親王
- ・夫人（ぶにん/おおとじ） - 3 名以内、三位以上（公卿）の娘
- ・嬪（ひん/みめ） - 4 名以内、五位以上（貴族または豪族）の娘

持統天皇のお気に入りの橘三千代（たちばなみちよ）が、持統天皇に強く働きかけた結果と考えられている。

娘宮子が文武天皇の後となったことにより、天皇家の外戚として、不比等はちやくちやくと、したたかに藤原氏の権力基盤を築いていく。

708 年、文武天皇が若くして崩御したが、わずか 7 歳の首皇子（おびとのみこ、後の聖武天皇）をすぐに即位させるわけにはいかなかったが、不比等の孫である首皇子を即位させることを画策する。まずは元明天皇（文武天皇の母、草壁皇子の妃、天智天皇の皇女）を立てて時間稼ぎをしたと言われている。そして平城京遷都に奔走する。新しい都を造ることにより、飛鳥地方の豪族たちの影響力が及ばないようにする。また首皇子（おびとのみこ）のデビュー場所とするためと言われている。

そして 708 年、元明天皇により平城京遷都の詔が発せられ、710 年に遷都する。

716 年、孫の首皇子を即位させて、聖武天皇とする。その直後、三千代との間に生まれた安宿媛（あすかべひめ、光明子）を聖武天皇に嫁がせる。

養老律令の編纂作業にとりかかるが、施行を前に 720 年に死没。

不比等は権力欲の権化のようにいわれているが、大宝律令の制定、養老律令の編纂作業、平城京遷都、古事記と日本書記の編纂、遣唐使の復活等、国の発展のために尽くした実績もある。（注. 2）政治の表舞台にも登場し、数々の事績も残しながら下級官僚から右大臣にまで上り詰めたのだ。

注記 2. 不比等の主な政策

701 年	大宝律令制定。国郡が整備された。
702 年	遣唐使の復活
710 年	平城京遷都
708 年	銅銭の鑄造, 和同開珎を鑄造
712 年	古事記完成。不比等が編纂の中心的な役割を果たす
720 年	日本書記完成。不比等が編纂の中心的な役割を果たす
720 年	養老律令の編纂に尽力したが死去。（完成は 757 年）

不比等とその息子四兄弟によって、藤原氏の繁栄の基礎が固められるとともに最初の黄金時代を作り上げた。

3. 橘三千代の野望

橘三千代は 665 年頃、県犬養東人（あがたのいぬかいのあずまびと）の娘として生まれる。父親は伴造（とものみやつこ）程度の身分で国政の中枢に参与するようなランクの氏（うじ）ではなかった。

そして 7 世紀末～8 世紀前半にかけての宮廷で、大きな政治的影響力を持つようになる。「後宮において隠然たる勢力を振るった」というように説明されることが多い。想像もできないような権力を確立した。

宮廷に入り、どうしたことか持統天皇にとっても気に入られ、軽皇子（かるのみこ、持統天皇の孫、のちの文武天皇）の乳母となり、養育も任されたと考えられている。

元明天皇（文武天皇の母）より橘宿禰（たちばなのすくね）姓を賜る。のちに美努王（ぬいおう）との間にできた葛城王（かつらぎおう）と佐為王（さいおう）に橘姓を名乗らせる。

不比等との間にできた子、安宿媛（あすかべひめ、光明子）は聖武天皇の后になるが、入内させるにあたっては、三千代の働きが大きかったと推定されている。

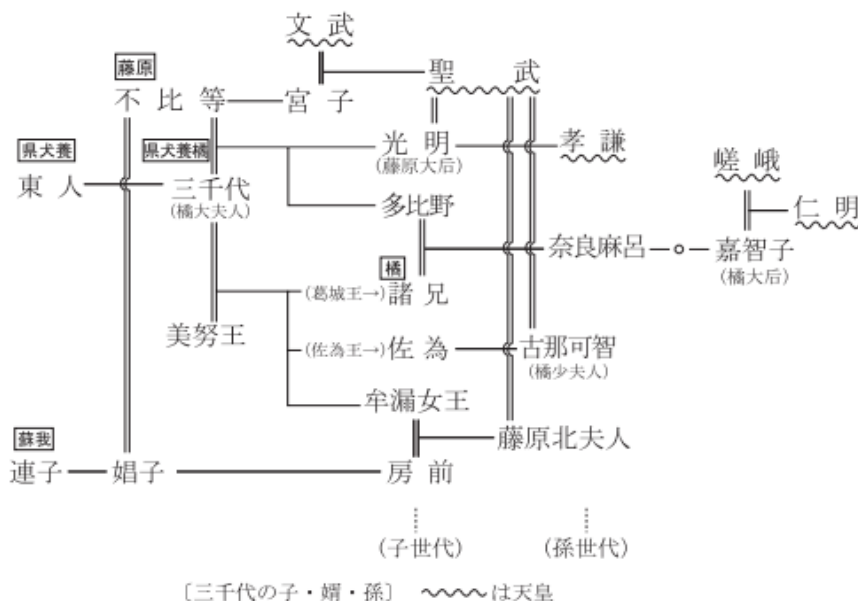
朝廷では藤原武智麻呂が大納言、藤原房前が参議にというように、藤原兄弟が最高ポストを占め始めていた。さらにエスカレートする。藤原四兄弟が相次いで天然痘で死没してからは、橘兄弟が一举に、平城京の出世コースを登りつめていく。諸兄は生前中に従一位の左大臣となり、死後に正一位に叙せられ、人臣を極めた。

不比等との間の子、安宿媛（あすかべひめ、光明子）は聖武天皇の后になる。のちに光明皇后となるが、非皇族の人臣皇后の例となった。

733年、三千代は死去したが、文武天皇の乳母を足掛かりに、持統天皇と文武天皇の信頼を得、周到な婚姻政策を遂行して、女性として想像もできないような権勢を誇ったのだ。周到な婚姻政策は以下の文献を参照してもらいたい。

【この図より、三千代の周到な婚姻政策からは、三千代の政治力の大きさが見て取れる。が、たんなる勢力拡大ではない。こうした布石を通じて、王権と半ば融合させつつ藤原氏・橘氏を縦横につなぐ権力核が形成されていったのである。

三千代を中心に据えた婚姻・親族図



三千代が美努王との間の子・諸兄と不比等との間の子・多比野は同母異父兄弟婚なので、橘奈良麻呂は、三千代の政治的勢威と財を父母両方からの太いパイプで受け継いだことになる。こうした近親婚は、富の分散を防ぐ有効な方法として、六、七世紀以降に王権中枢部から始まり、有力氏族の間でも繰り返し行われている。(義江明子氏著「橘三千代」より)】

○藤原家隆盛に尽力

不比等亡き後も、不比等の子・藤原四兄弟(注.2)と力を合わせ、藤原家の権力基盤を不動のものとした。

南家の武智麻呂(むちまろ)、北家の房前(ふささき)、式家の宇合(うまかい)、京家の麻呂(まろ)である。そろって平城京朝廷の高いポストに就く。やがて彼らは皇族を排除し天皇と直結して、藤原氏の栄耀栄華を謳歌する。その基礎を作ったのは橘三千代だ。

長屋王を追い落とした後、9名の公卿(くぎょう、大臣、参議、三位以上の貴人)うちの4名を藤原不比等の息子・藤原四兄弟が占めることになった。

注記2. 藤原四兄弟

名前	略 歴
藤原南家 武智麻呂 (むちまろ)	母；蘇我姫子(そがのおんし)。息子；仲麻呂 720年、不比等が死去する。 721年、従三位に昇進し、大納言に任官される。 729年、「長屋王の変」を主導したとされ、変後に大納言に昇進した。734年、従二位、右大臣の官位を授けられた。737年、天然痘で死没。臨終の床にて正一位、左大臣の官位を授けられる。760年、太政大臣を追贈される。
藤原北家 房前 (ふささき)	母；蘇我姫子(そがのおんし)。息子；冬嗣 717年、参議となる。政治的野心はなかったとされる。 737年、天然痘で死没 道長は北家の系統である
藤原式家 宇合 (うまかい)	母；蘇我姫子(そがのおんし)。息子；広嗣 731年、参議に昇進。 734年；正三位にいたる。 737年、天然痘で死没
藤原京家 麻呂 (まろ)	母；五百重娘(いおえのいらつめ、不比等の異母妹)。息子；浜成 720年、従四位上に叙せられる。726年、正四位上に叙せられる。 729年、従三位に昇叙され公卿になる。 731年、参議となる。 737年、天然痘で死没

○橘家隆盛に尽力

三千代だけに賜った「橘宿禰」を賜ることを願って許され、美努王（みぬのおう）との間に生まれた葛城王（かつらぎおう）の名を改めさせ橘諸兄（たちばなもろえ）とした。諸兄は実質的な政権のトップである従一位・左大臣にまで任じられた。（注.3）橘家の隆盛も達成したのだ。

注記.3 橘家

名前	略 歴
橘諸兄 (たちばなのもろえ)	父；美努王、母；橘三千代 736 年、臣籍に下り、名を葛城王から橘諸兄に改める。 737 年、(藤原四兄弟の死去に伴い、大納言に任命される。 738 年、正三位、右大臣に任じられる。 743 年、従一位、左大臣に任じられる 749 年、正一位に叙せられる 756 年、辞職を申し出て引退 757 年、死没
橘佐為 (たちばなのさい)	父；美努王、母；橘三千代 736 年、臣籍に下り、名を佐為王から橘佐為に改める 737 年、正四位下に叙せられるが、天然痘で死去する。 娘の広岡古那可智（こなかち）が聖武天皇夫人（ぶにん）になる
橘奈良麻呂 (たちばなのならまろ)	父；橘諸兄、母；多比能（たびの、不比等と三千代の娘、諸兄と多能は同母異父兄弟婚である） 749 年、参議に任じられ公卿に列す 752 年、但馬因幡按察使に任じられる 754 年、正四位下に叙任される 757 年、右代弁（太政官の職）に任じられる 台頭してくる藤原仲麻呂を排除しようと謀ったが失敗し、捕らえられ、獄死する。いわゆる「橘奈良麻呂の乱」である。 息子・清友の娘・嘉智子が嵯峨天皇の妃（きさき）となって、後の仁明天皇を産む。 清友の息子・氏公は右大臣となる。

4. 藤原不比等と橘三千代に関わる主な出来事をまとめる

	天皇家	藤原家	橘家
--	-----	-----	----

659 年		藤原不比等、中臣鎌足の次男として誕生	
665 年			三千代の父は県犬養東人（あがたのいぬかいのあずまびと）とされ、誕生時期は不詳だが、この頃に出生したと考えられている
668 年	天智天皇即位		
669 年		鎌足が死去	
672 年	天智天皇崩御 「壬申の乱」	「壬申の乱」で同族の有力者が近江朝について処罰されたため、中臣氏は朝廷の中枢から一掃される。	
673 年	天武天皇即位		
683 年	軽皇子（かるのみこ、天武天皇および持統天皇の孫、草壁皇子の子、後の文武天皇）誕生		
684 年			この頃、三千代が美努王（みぬのおう、敏達天皇の後裔）に嫁し、葛城王（かつらぎおう、のちの橘諸兄）を出生。三千代は軽皇子の乳母を努めていたと考えられている。後に佐為王（さいおう）と牟漏女王（むろのおおきみ、藤原房前に嫁ぐ）を生む
686 年	天武天皇崩御		

688 年		不比等、下級官人の判事(従五位下)となる。	
689 年	草壁皇子死没		この頃、三千代が美努王と離別し、不比等の後妻となったと考えられている。
690 年 2 月 14 日	持統天皇が即位		美千代、持統天皇の信頼を得る。
696 年	太政大臣高市皇子(たけちのみこ、天武天皇の長男)死去	不比等、太上天臣高市皇子)の死去に伴い政権中枢に参画した。三千代の力添えにより皇室との関係を深めていった	
697 年 8 月	持統天皇の譲位により、軽皇子が即位し文武天皇となる。	不比等の娘・宮子(みやこ)が文武天皇即位直後に文武天皇の夫人(ぶにん)となる	文武天皇の乳母だった三千代の働きかけで、宮子が文武天皇夫人になったという説がある
701 年		不比等が立案した大宝律令が制定される。功績により、大納言に任じられる。 不比等の娘・宮子が首皇子(おびとのみこ)を出産	不比等と三千代の間に安宿媛(あすかべひめ、のちに聖武天皇の后、光明皇后)を出産
708 年	阿閉皇女(あへのみこ、天智天皇の皇女、草壁皇子の妃)が即位し、元明天皇となる。	不比等、右大臣(従二位)となり政権中枢に参画した。	三千代、天明天皇から橘宿禰(たちばなすくね)姓を賜る
710 年	平城京遷都	不比等が平城京遷都に奔走する。	

712 年		古事記完成。不比等 が編纂に関わる	
714 年	不比等の娘・宮子 が産んだ首皇子 が 14 歳にて皇太 子になる		
715 年			三千代、従四位に叙せ られる
716 年			不比等と三千代の娘・ 安宿媛が 16 歳にて首 皇子の皇太子妃にな る（結婚）
717 年		北家・藤原房前、参議 になる	三千代、従三位に叙せ られる
718 年	首皇子と安宿媛 の間に皇女・安倍 内親王が生まれ る。		
720 年 8 月 3 日		不比等死去。 その後、藤原四兄弟 の力で異母妹の光明 子が民間初の皇后と なり、藤原氏繁栄の 基礎が築かれた。 不比等、死去後に太 上大臣（正一位）、淡 海公が追贈与され る。	
720 年		不比等が中心になっ て編纂していた日本 書記が、完成し制定 される	
721 年 12 月	元明天皇が崩御。	南家・藤原武智麻呂、 大納言になる。	
721 年			三千代、正三位に叙せ られる。

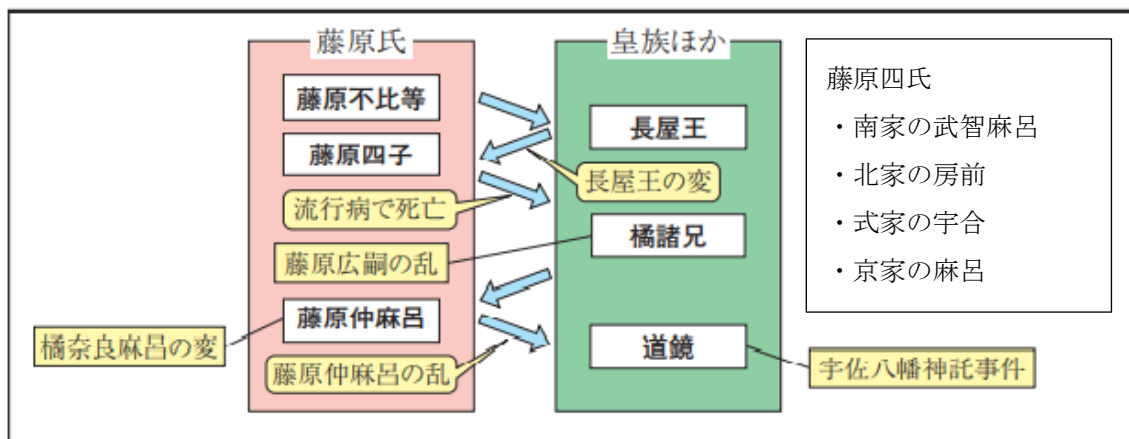
			天明天皇の危篤に際し、出家
724 年 3 月 3 日	首皇子が即位し、 聖武天皇となる。		聖武天皇即位直後に 安宿媛が聖武天皇の 夫人（ぶにん）になる
729 年	宮子が光明皇后 となる （夫人（ぶにん） から皇后（こうご う）に）	「 長屋王の変 」で、長 屋王が死に追いやら れる。 長屋王は皇族出身で ない宮子を夫人（ぶ にん）から皇后にと 強行する不比等に反 対した。 国家を傾けようとし たとの無実の罪で、 藤原四兄弟に捕らえ られ、糾問を受け縊 死した。 長屋王死去後、藤原 四兄弟が一気に権力 の座を手にする 京家・藤原麻呂、正四 位上に叙せられる	「長屋王の変」は藤原 四兄弟の陰謀とも言 われるが、彼らは手足 となって実行したが、 その陰謀の黒幕は三 千代とされている。
731 年		式家・藤原宇合、参議 に昇進	
733 年 12 月 28 日			三千代、従一位に叙せ られる
734 年		宇合、右大臣に任ぜ られる	
736 年			三千代の長男・葛城王 が弟の佐為王と共に 橘宿禰姓を継ぎ、橘諸 兄となる
737 年		天然痘の流行で、権 勢を誇っていた藤原	諸兄が大納言になる

		四兄弟をはじめ参議官が死去。	
738 年			諸兄が正三位、右大臣になる
740 年		「藤原広嗣の乱」 宇合の長男・藤原広嗣が乱を起こす。 諸兄が台頭し、広嗣は太宰府に赴任させられ、中央から遠ざけられたことに不満を持つ	
743 年		藤原仲麻呂、従四位上、参議に叙せられる。光明皇后の後ろ盾により、昇進を続ける	諸兄が従一位、左大臣、そして正一位に叙せられる
749 年	孝謙天皇（安倍内親王）が即位する。		
754 年 8 月 11 日	（聖武天皇の生母・宮子死没）		三千代、死没
757 年			「橘奈良麻呂の乱」 諸兄にかわり、権勢を握った仲麻呂を打倒しようとして、奈良麻呂が大伴・佐伯氏らと結んで、仲麻呂の擁立した皇太子・大炊王（後の淳仁天皇の廃太子を計画。未然に発覚し、奈良麻呂らは捕らえられ、奈良麻呂は獄死した。（拷問？）
758 年	淳仁天皇（大炊王）即位		

760 年	光明皇后死没	藤原仲麻呂、大師（太政大臣）に任じられる	三千代、死後に正一位に叙せられる。大夫人（たいふじん、天皇の生母に与えられる称号）の称号を追贈される
764 年	淳仁天皇廃帝 称徳天皇即位（孝謙天皇の重祚（ちようそ））	「藤原仲麻呂の乱」 光明皇后の後ろ盾を失った仲麻呂が孝謙天皇・道鏡と対立。軍事力を持って政権を奪取しようとして失敗。仲麻呂は吉備真備等に捕らえられ、斬首される。	

5. 政局変遷の整理

天皇	政権担当者	出来事
元明	藤原不比等	710 平城京遷都
元正		720 藤原不比等死去
	長屋王	721 長屋王、右大臣に就任（724 左大臣に就任） └ 百万町歩開墾計画や三世一身法を出す
聖武		729 長屋王の変…藤原四子が長屋王を自殺させる
	藤原四子	宮子（不比等の娘）を聖武天皇の皇后とする
		737 藤原四子、相次いで病死
	橘諸兄	738 橘諸兄、右大臣に就任 └ 吉備真備・玄昉を重用して唐風政治を行う
		740 藤原広嗣（宇合の長男）の乱—諸兄の台頭に不満を持つ
孝謙	藤原仲麻呂	藤原仲麻呂の台頭…光明皇太后の信任を得る
		757 橘奈良麻呂の変—諸兄の子が謀反を計画
淳仁		758 仲麻呂、淳仁天皇から恵美押勝の名を賜る
	道鏡	道鏡の台頭…孝謙太上天皇の信任を得る
称徳		764 藤原仲麻呂の乱→仲麻呂敗死
		769 宇佐八幡神託事件
光仁		770 称徳天皇死去→道鏡は下野薬師寺に追放



6. まとめ

不比等と三千代がダブル不倫に走り、お互いの連れ合いや子供たちを捨てるほどの大恋愛だったのだろうが、単なる恋愛感情だけでなかろう。お互いに野望家の臭いをかき取り、お互いの能力や立ち位置を認識し、狙いを定めて結びついた。そして両家の権力基盤を強固にするための野望を次々と実現していったのだろう。

二人は平城京のさまざまな出来事にかかわった黒幕夫婦である。しかし、左大臣長屋王（天武天皇の長男高市皇子の子）が反乱を企てたという、いわゆる「長屋王の変」（注. 4）のときには不比等は既に他界しているので、長屋王を排除するために、「変」をでっちあげて藤原四兄弟を使って一連の指揮をしたのは三千代であろう。三千代が黒幕中の黒幕と言える。

注記 4. 長屋王の変

長屋王の使用人であった漆部造君足と中臣宮久東人が「長屋王が天皇の子・基王を呪い殺した」と密告。聖武天皇に兵をさし向けられ自害し、吉備内親王と息子たちとともに縊死した。吉備内親王は聖武天皇の叔母にあたり、3人の息子たちとともに皇位継承の可能性があった。長屋王は無実であり、藤原氏の策謀と考えられている

事件の背景は、

皇后と妃は皇族でなければならず、夫人（ぶにん）と嬪（ひん）は臣下の娘が当てられた。安宿媛は皇族でないので夫人の地位にいたが、強引に皇族に立てたのである。長屋王は徹底的に反対した。不比等の娘婿（次女の藤原長娥子）であり、それまでは藤原一族と政策遂行に一体となって協力してきたが、不比等の望外な野望を知り、不比等に背を向けて藤原一族を攻撃し始めたことである。

二人の結びつきによる相乗効果は、二人の想定をはるかに越えたものだったのだろう。

王権中枢を取り込んだ藤原家の権力核を作り出したと言えるし、藤原四兄弟は絶大な権勢を誇るようになる。美努王との間にできた子たちは橘姓を得て、藤原四兄弟が天然痘で死没した後、権勢を極めたのだ。

三千代は歴史上において、のちの春日局（かすがのつぼね、注. 5）と並び称されるほどの猛女である。

注記 5. 春日局

3代将軍徳川家光の乳母。「春日局」とは朝廷から賜った称号である。大奥を築いた人物であり、松平信綱（『知恵伊豆』と言われた切れ者）、柳生宗矩と（家光の剣術指南役で、剣豪から大名に昇進）共に家光を支えた「鼎の脚」の一人（家光を支えた最重要人物3人のうちの一人）に数えられた。また、朝廷との交渉の前面に立つ等、近世初期における女性政治家として随一の存在であり、徳川政権の安定化に寄与した。家光の生母説もある。

童門冬二氏によると三千代と春日局の共通点は

【・夫と子供をほうりだして家出したこと。

- ・天皇から直接「姓」もしくは「局名」を貰ったこと。
- ・天皇あるいは将軍の後宮（ハーレム）の総取締役になったこと
- ・しかし、本人は、天皇もしくは将軍の性の対象にはならなかったこと。
- ・スタートは共に天皇の子あるいは将軍の子の乳母であったこと。
- ・そして、それぞれ乳を与えて育てた子を、トップの座に押し上げたこと。
- ・そのために、女性としては絶大な権力を持ち、支配する後宮はもちろんのこと、表の機関である朝廷あるいは幕府の高級職の人事にもかなり口を入れたこと。
- ・当時としては、女性として想像もできないような権力を確立したこと。

わずかに違うのは、春日局が、二度と結婚しなかったのに対し、橘三千代のほうは、もう一度夫を持ったことだ。それも、当時の朝廷で最も権力を持っていた藤原鎌足の子・藤原不比等を選んだ。その点、猛女という意味では橘三千代の方が上かもしれない。】（しかし、春日局が家光の生母だったとしたら状況がかなり異なってくるが。）

7. その後の藤原家

北家の良房流一族が、天皇の外戚として摂政や関白あるいは内覧（注. 6）といった要職を占め、政治の実権を代々独占し続けた。これを「摂関政治」（注. 7）という。平安望月の歌で有名な道長はこの北家である。

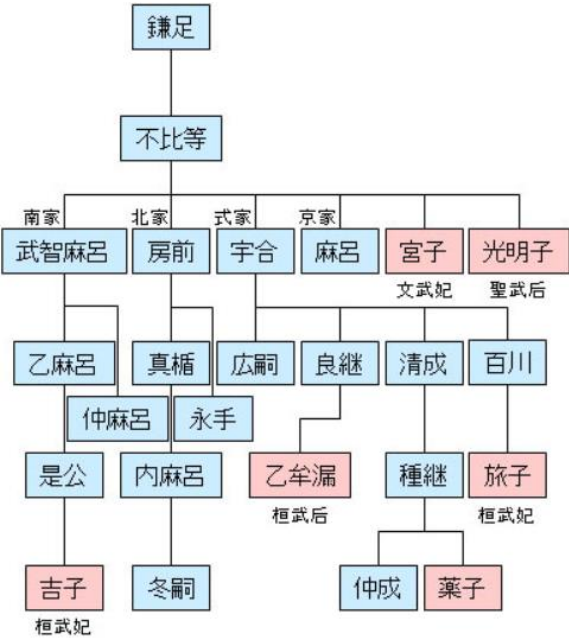
注記 6. 内覧

太政官から天皇に奏上する文書、または天皇の裁下する文書を内見すること、またその職を与えられた者をいう。

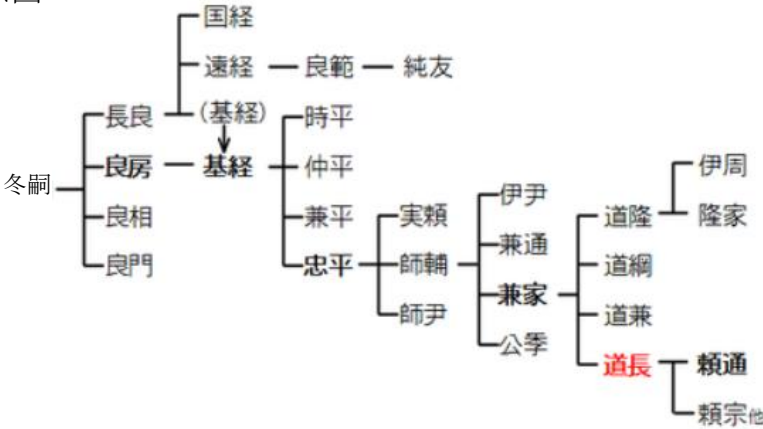
注記 7. 摂関政治

平安時代、藤原氏の嫡流が摂政・関白を独占し、天皇にかわって、あるいは天皇を補佐して行った政治

○藤原家系図



○藤原北家の系図



参考文献

童門冬二著；歴史の仕掛人

永井路子著；新・歴史をさわがせた女たち

義江明子著；橘三千代 一権力核の起点となった太刀自一

以上